能登を見つめ、そして見つける巡検
～能登の生業（なりわい）の視点から～

団体名●金沢星稜大学・金沢星稜大学女子短期大学部（各学部有志学生）
上越教育大学大学院（有志院生）
代表者名●辰巳佳彦（女子短期大学部・助教）、柴田ひかる（上越教育大学大学院・院生）

はじめに

2024年1月の能登半島地震の発生から1年以上が経過した。能登半島は、その後も豪雨災害に見舞われるなど、度重なる被災を経て現在も各所に傷痕が深く残る復興の途上にある。

深刻な現状を正しく理解する端緒として、本学（金沢星稜大学および金沢星稜大学女子短期大学部）の有志学生と、上越教育大学大学院で社会系教育分野の教員を目指す有志院生が集い「能登を見つめ、そして見つける巡検」と題した合同巡検を実施した。

また、本活動は異なる大学や短大、専門領域を持つ学生や院生が、多角的な視点から被災地の現状を捉え直せるようになることを狙った活動である。本活動を通じて、将来的に復興への関りを志す本学学生や、学校教育の現場において、子どもたちを導く同大学院生が、現地での経験や知識を地域社会や教育現場へ還元し、中長期的な「創造的復興」に貢献できるようになることを目的としている。

本活動を通じて、能登の生業（なりわい）の現状を知り、そこから映し出される将来の能登の姿を構想したいという展望も込めた活動である。

活動内容

本活動は、上越教育大学大学院の柴田ひかる氏による企画を軸に、本学の既存の取り組みと融合させた巡検プログラムとして、辰巳助教との共同企画として実施した。

参加者は、本学から経済学部（3・4年次）7名、人間科学部（3年次）2名、人文学部（3年次）1名、女子短期大学部（2年次）2名の計12名の参加となった。同大学院からは、修了生を含めた計9名の参加となり、大学や学部の垣根を越えた構成となった。

本巡検の実施自体は1回のみの試みではあるが、これを機に、参加学生および院生が「創造的復興」について主体的に考え、継続的に関わりを持つための契機となることを重視した。具体的には、以下の内容に基づき活動を展開した。

(1)創造的復興論の概要と講義

本学開講科目である「創造的復興論」において、同科目の共同担当者の1人である経済学部の佐藤講師による講義を実施した。「地図から読み取る災害情報」をテーマに、地理的データの読解を通じた防災や減災の視点を学んだ。

石川県および本学が掲げる「創造的復興」の理念についての概要説明を辰巳助教が行った。参加者への講義や説明を通じて、単なる原状復旧に留まらない、地域の未来を見据えた復興のあり方について考えさせられる内容であった。

(2)観光地および文化施設への訪問

能登地方を代表する観光地である輪島朝市や白米千枚田を訪問した。現地では、各種報道だけでは捉えきれない地形の変容や建物の損壊状況、復興への歩みについて、現地を訪れることによって被災地の現状を肌で感じる機会となった。

また、「のと里山里海ミュージアム」や珠洲の「揚げ浜塩田」関連施設では、現地の職員の方々から、能登の歴史や文化、震災後の現状について解説を受けた。これらの説明から、伝統的な生業（なりわい）の存続に向けた課題や、これから果たしていくべき役割など、多角的な視点から能登の復興を考えることのできる知見を得ることができた。

(3)漁港および景観が変化した地域の巡検

能登半島地震における海岸の隆起や地形の変容は顕著であり、現地の光景を目にすれば、誰もがその激しさが分かる象徴であった。特に黒島漁港においては、地震以前の景観が想像し難いほどの変化が生じており、参加者一同は震災の爪痕の深さと、復興の難しさを痛感した。

また、輪島市曽々木地区の「窓岩」では、岩体の一部が崩落し、その名の由来である岩窓が消失していた。震災前の姿を知る者にとっては景観の著しい変化であり、初めて目にする参加者にとっては、本来の姿を想像することが困難なほど変化している現状を目の当たりにした。

(4)被災者および復興支援組織の方々との交流

被災当事者として復興支援を担う「のと中高生復興プロジェクト」の発起人の方々との交流会を実施した。自らも被災しながら活動を展開するに至った経緯やその信念を聞き、復興支援の多様なあり方について理解を深める貴重な機会となった。

交流会では、本活動の参加者と同プロジェクトメンバーとの間で、活発な意見交換が行われた。終了後には、参加者をグループ分けしたディスカッションを実施し、付箋を用いた意見の集約と班内での共有を経て、各代表者が全体に向けて班の議論内容を発表した。

宿泊先である七尾市の石政旅館では、経営者夫妻から震災当時の詳細な状況を聞いた。お話の中では、近隣に避難所がありながら、情報の混乱から適切な避難先を判断できない住民が多かったという実態があったことを知り、日頃からの災害対応策の周知や防災、減災意識向上の重要性を再認識した。

また、2日目朝の出発の際には、柴田氏より前日のディスカッションや活動の総括がなされ、本活動の意義を改めて認識することのできた1日目の活動であったといえる。

成果、結果の考察

参加者の多くは、将来的に地元企業や行政機関、教育現場での活躍を目指す学生や院生である。本巡検を通じて得られた知見や個々に感じた思いと経験は、能登の中長期的な復興を支える貴重な機会となった。また、現地での経験を通じて、ただ単純に見た知ったといったインプットに留めるのではなく、自らの今後のキャリアにおいて、どのような形で社会へ還元できるかを真摯に見つめ直すことができた。

本活動は、今後の地域社会や教育を担う学生や院生が、被災地の現実に根ざした経験を共有したことによって「創造的復興」の実践へと繋がる確かな第一歩となった。

今後の課題、展望

本活動は、被災地の持続的な復興に向けて「自分に何ができるか」を主体的に考え直す重要な契機となった。

今後は、本活動で得たことを実践していくために、参加者自身が防災や減災意識を高めることはもとより、その知見を周囲や地域社会へとアウトプットし、波及させていくことが重要である。

今回の巡検を起点とし、代表者を含めた参加者全員が、地域社会のレジリエンスに寄与する人材として成長し続けることを今後の展望としたい。

【謝辞】

各訪問先において、貴重な解説や実体験をお話しいただいた関係各位の皆さまに厚く御礼申し上げます。皆さまの言葉から得られた学びは、参加学生と院生にとって、代えがたい経験となりました。

また、上越教育大学大学院の山縣耕太郎教授におかれましては、本企画の立案・実施に際し、ご指導と多大なるご協力を賜りました。ここに記して、改めて厚く御礼申し上げます。